様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５５１１００５

研究課題名（和文）日本語教育・留学生教育における日本型「知の技法」の活用に関する研究

研究課題名（英文）A study on the utilization of the method of the Japan of "techniques of knowledge" in Japanese language education and international students education

研究代表者
松永　典子（Matsunaga, Noriko）

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：８０３３１１１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、総合型日本語人材養成プログラム開発という目的のため、理論研究と実践研究を行った。まず、理論研究では、日本型「知の技法」の有する自文化を相対化する視点と他文化に対する積極的受容姿勢とが相互文化学習の手法として有効であるという理論化を行った。次に、その理論を日本語教育・留学生教育に還元するための教材開発及び教育実践研究を行った。実践研究の結果、本実践における日本人学生と留学生が協働でひとつの課題解決に取り組むという方法論が学習者に課題解決に向けた意識を促す可能性があることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we conducted theoretical research and practical research for the purpose of developing comprehensive Japanese human resources training program. First of all, in theoretical research, we theorized that the viewpoint of relativizing self-culture of the Japanese type "knowledge technique" and the active acceptance attitude towards other cultures are effective as a method of cross-cultural learning. Next, we conducted teaching material development and educational practice research to reduce the theory to Japanese language education and international student education. As a result of research practice, it was suggested that the methodology that Japanese students and international students in this practice tackle one problem by collaborating may encourage learners to awareness towards solution of problems.

研究分野：日本語教育学、多文化共生教育論

キーワード：日本語教育　日本研究　留学生教育　専門教育　人材養成　教育プログラム　教材開発　知の技法

１．研究開始当初の背景

今日の日本語教育・留学生教育への学術的要請として、「日本語＋α」の人材を養成するということが強く求められている。つまり、単に日本語ができるだけでなく、学術的・専門的な素養を持ち、国際競争力強化に資する異文化コミュニケーション能力の高い人材が求められている。加えて、21 世紀の複雑化する知識集約型社会における幅広い課題やニーズに対応するためには、「+α」の要素として、従来の知を「加工」し、新たな知を創造していくことのできる日本型「知の技法」の活用が不可欠であり、本研究が切り込んでいこうとする領域はまさにこの点である。

しかし、従来の日本の大学・大学院、特に人文社会分野は、日本人学生の教育を主対象としてきたため、アジアからの留学生のニーズに教育内容の改革が追い付かず、ニーズにかなう教育内容を十分に提供できていない。こうした問題を解決するひとつの方法として本研究が提示するのが、分野横断的日本研究の成果を教育プログラム開発に活用することである。

２．研究の目的

本研究では、日本が伝統的に他から「受容」した知を日本に適応可能な形に調整しながら「加工」「活用」する能力に秀でている点に着眼した。この**文化調整型とも言うべき日本型「知の技法」を活用**した**人材養成プログラム、方法論の構築**を通して、他国の同様の課題にも貢献し得る普遍的視点を確保することを目的とする。このため、本研究では人文社会科学分野の学際的比較文化研究の観点から、日本型「知の技法」を定式化し、またその意義や長所を明らかにし、こうした研究成果を留学生を惹きつけることのできる分野横断的な教育プログラムの創出に生かす。

３．研究の方法

本研究では、以下の（1）から（6）の手順に沿って、理論研究と教育実践研究との両輪を動かし、研究課題の解明を進めていく。(1)理論研究においては、日本に固有の部分と、共有化が可能な部分を明らかにするため、「知の加工」という分析の視角と、「受容」「加工」「活用」「発信」というキーワードを設定する。(2)日本型「知の技法」の強みと弱みを各学問分野の事例で示す。(3)事例に関しては、大学院教育に還元するとともに、分析により、日本型「知の技法」の特徴と普遍性を抽出する。(4)教育実践研究においては、理論研究によって明らかにされた日本型「知の技法」の事例及び理論や抽出した特徴と普遍性を留学生用日本研究入門テキストなどの形で教材化し、授業実践に還元する。(5)教育実践をモニタリングし、その結果をさらに研究計画にフィードバックし、教育プログラムを構築する。(6) 他国の同様の課題に対して、問題点の共有化、方法論の協同化をはかるべく、研究成果を発信する。

４．研究成果

理論研究においては、日本型「知の技法」が自文化を相対化する視点・姿勢をもつと同時に、「各地域の元来の文化や慣習、言語を生かした国作り・社会作りを強く志向するものである」点において、文化の相互学習の手法としても活用可能なものであるという理論化を行った。

教育実践研究においては、理論研究で得られた理論を教育に還元すべく、教材開発及び教育実践を行い、学部生、大学院生を対象に総合型日本語人材養成プログラムを開発した。開発したプログラムによる平成 28 年度の実践研究の分析からは、知識や視野の広がりという点では効果が見られたものの、技能、態度、志向性をどう養い測るのかという点では課題が残っていた。そこで、平成 29 年度の実践から技能、態度、志向性を測るためにルーブリック評価を新たに導入した。さらに、近年、コミュニケーション教育のみならず「主体性・多様性・協働性」を育む方法として入試等でも活用されている演劇づくり（平田 2016）をタスク活動の総括として取り入れた実践を試みた。実践の分析の結果、本実践における日本人学生と留学生が協働でひとつの課題解決に取り組むという方法論が学習者に課題解決に向けた意識を促す可能性があることが示唆された。本研究成果の他国の同様の課題への活用については、今後、別途検討していくことが必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　9 件）

1. 松永典子「コトバと社会と人をつなぐための日本語教育　―演劇づくりを取り入れた実践を通して―」『2017 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.185－189、2017、査読有

2. 松永典子「社会とつながるための日本語教育ー演劇づくりの実践とルーブリック評価の検証から」　CAJLE2017 大会 Proceedings、pp.136-145、2017、査読有

3. 松永典子「総合型日本語人材の養成に向けてアカデミックスキルと専門をつなぐ―日本研究入門テキストを使用した教育実践の分析から―」『2016 年度日本語教育学会中国地区研究集会予稿集』pp.7-12、2016、査読有

4. 徳永光展「留学生の日本理解に資する授業構築の試み－日本近代文学作品の翻訳を取り上げて－」『山口国文』39 号、pp.15-28、2016、査読無

5. Noriko Matsunaga, Collaboration of Japan Studies and Japanese Language Education in Graduate School-From the Approach of Academic Skills Training-, Japanese Language Education in Europe, 2015,pp.311-312,査読有.

6. 松永典子・施 光恒「学際統合的日本研究の成果を還元する試み―大学院総合演習「知の加工学」を事例に―」『比較社会文化』20、 pp.61-76 、2014、 査読有

7. 徳永光展・李けん「中国人日本語学習者が抱える問題点」『社会環境学』3 巻、pp.35-53、2014、査読無

8. 徳永光展「ベトナムにおける日本文学教育の実践―ハノイ大学大学院を例として」 『譜写新世界：東亜的文化歴史與顧景（東亜文化交渉学会第 5 記念会)』上冊、pp.257-262、2014、査読有

9. 松永典子「学際統合的日本研究の成果を留学生教育・日本語教育に還元させる大学院教育の試み」『ハノイ大学日本語教育 40 周年記念第 2 回国際シンポジウム紀要』p.261、2013、査読有.

〔学会発表〕(計 16 件)

1. 松永典子「日本における日本語教育の現況と展望」韓国日本研究総連合会第 6 回国際学術大会及び Symposium、**招待講演**、2017

2. 松永典子「日本研究・日本語教育の統合から文理融合へ」九州大学・梨花女子大学合同・統合学際研究会「東アジアにおける文理融合研究の可能性」**パネル講演**、2017

3. 松永典子「近代語彙の形成過程に見る日本の「知の加工」―新漢語創出方法を中心に―」『九州大学― 梨花女子大学（韓国）合同国際シンポジウム―近代東アジアにおける知の加工・移動・翻訳』**パネル講演**、2016.

4. 松永典子「日本研究の知見を生かした教材開発の試み―アカデミックスキルと専門をつなぐ―」松永典子・施光恒・徳永光展「学際統合型日本研究と日本語教育の連携―日本入門テキストの開発と教育実践の分析から―」第 11 回国際日本語教育・日本研究シンポシウム・香港公開大学・共同パネル発表、総頁 2 頁、2016、査読有.

5. 施 光恒「社会科学と日本語教育の連携―文化的視角をどのように活かすべきか」第 11 回国際日本語教育・日本研究シンポシウム・香港公開大学・同上パネル発表、総頁 2 頁、2016、査読有.

6. 徳永光展「留学生に対するアカデミック・ライティング指導―日本文学の翻訳を素材として―」、第 11 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム・香港公開大学・同上パネル発表、総頁 2 頁。

7. 施　光恒「英語化政策のはらむ危険性」日本生態学会第 63 回全国大会、**招待講演**、2016

8. 施　光恒「これからの日本の言語政策に向けて―英語化批判、および「タタミゼ」型秩序形成の可能性について」慶応義塾大学タタミゼプロジェクト研究会、**招待講演**、2015

9. 施　光恒「日本発の一般性ある人文社会科学はありうるか」、九州大学大学院比較社会文化研究院「日本語教育・留学生教育における日本型「知の技法」の活用に関する研究」研究チーム主催ワークショップ、2015

10. 伊藤泰信「文化人類学の観点から「＋α」の教育を考える」、九州大学大学院比較社会文化研究院「日本語教育・留学生教育における日本型「知の技法」の活用に関する研究」研究チーム主催ワークショップ、2015

11. 施　光恒「九州大学における取組み―「知の加工学を中心に」、九州大学地球社会統合科学府・梨花女子大学合同ワークショップ・近代東アジアにおける＜知識の移動／知の加工＞、2015

12. 徳永光展「日本と専門分野に長けた人材養成に資する日本語教育の構想」、四川外国語大学日本学研究所国際シンポジウム（文化交渉の視野における日本学)、2015

13. 松永典子「人をつなぎ、社会をつくる日本語教育」国際学術シンポジウム「東アジアの日本語教育と日本研究」**招待講演**、東義大学校、pp.17-22（韓国語翻訳 pp.23-29)、2015

14. 徳永光展「留学生の日本理解に資する授業構築の試み―日本近代文学作品の翻訳を取り上げて―」、第 28 回山口大学人文学部国語国文学会研究懇話会、2014

15. 松永典子「大学院教育における日本研究と日本語教育の連携―アカデミックスキ

ル養成の観点から―」，European Association for Japanese Studies（ヨーロッパ日本研究協会）国際会議（第 18 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム）、2014

16. 松永典子「大学院教育における学際統合的日本研究と日本語教育・留学生教育の連携―日本研究テキスト試行版作成に向けて―」華東師範大学外国語学院・九州大学大学院比較社会文化学府第三回合同研究会「日本と中国：言語教育・文化表象」、2014

〔その他〕

１．「多様性共存に関する統合学際型日本研究プロジェクト」ホームページ
dcjr-project.blogspot.com

２．松永典子・緒方尚美・余銅基『科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 25511005 中間報告書（平成 25 年度～平成 28 年度）「日本語＋α」の人材養成と人文社会科学系研究との連携―日本型「知の技法」に学ぶテキスト作成に向けて―』、総頁 44 頁、2015、査読無.

６．研究組織

(1)研究代表者

松永　典子（Matsunaga,Noriko）
九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授
研究者番号：80331114

(2)研究分担者

徳永　光展（Tokunaga,Mitsunori）
福岡工業大学・社会環境学部・教授
研究者番号：20341654

施　光恒（Se,Teruhisa）
九州大学・大学院比較社会文化研究院・准教授
研究者番号：70372753

(3)連携研究者

伊藤　泰信（Ito,Yasunobu）
北陸先端科学技術大学院大学・知識科学系・准教授
研究者番号：40369864

(4)研究協力者

祝　利（Zhu,li）
緒方　尚美（Ogata,Naomi）
余　銅基（Yeo,Dongki）